

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 187号

平成29年11月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

新渡戸稲造「人生雑感」より (7)

「死」の問題に対して (1)

死というような哲学じみた問題は、僕らの口を出すべきものでもなし、また出したところで何らの権威にもなるまい。が、只死というものは人間としてだれでものがるべからざる事柄であるから、哲学者でなくても、何人でも、死については何らかの思想を持っているものである。しかし、一般に言えば死なる現象を、いくらかもてあそぶというきらいもなきにしもあらずと思う。ほとんどたわむれ半分に死を論ずるというものもある。しかしこの死に対する観念態度のいかんは、すなわち凡俗と聖賢とを区別する標準じゃないかと思う。死を恐れるという語弊があるが、また死を軽んずると言えはよく聞こえるけれども、軽んじ方によっては甚だ愚の極であって、日本人は死することを何とも思わぬと言えは、一応ほめられるよう

なものの、生の責任を知らぬものと避難されるのも無理ならぬこと
と思う。

死の価値をさだむるものは生であると思う。しかして生の価値を
さだむる者は義務である。死を軽んずるということは、義務を軽ん
ずるという事になると僕は思っている。おのれの為すべきことをな
して、天にも地にも恥じない人は、死を見ること帰るが如くなるべ
きで、これは古来の聖人君子の死に方を見てもよくわかる。これに
反しておのれのなすべき事をもなさずして死を恐れぬのは、その辺
の熊だの八だのと択ぶところがない。こういう風に死を軽んずると
いうことは、決して褒むるに足らぬと思う。

「死」の問題に対して (2)

メーテルリンクの『青い鳥』—あれは読んでも面白い戯曲であるが、私はあの芝居をアメリカで見たが、実に今でも忘れられない印象を受けた。爺さんと婆さんが小屋の前に腰をかけて眠っている、そこに孫が二人走ってきて、

「おじいさん、おばあさん」

と声をかけると、二人が目を覚まして、孫を抱いて大変に喜ぶ、すると孫は、

「おじいさん、おばあさん、あなたたちはよほど前に死んでしまったんじゃないんですか」

というと、おじいさんが言うのに、

「世の中では私たちが死んだと言うんだが、いわゆる死んだ人も世の中の人を忘れていた間は死んだというんで、記念してくれる人がいると、その度ごとに生き返るんだ」という所がある。

それから同じ「青い鳥」の中に、——あすこは芝居で見ぬと分らぬところと思うが——子供ら二人が墓場へ行き、妹は、

「こんな寂しいところへきて怖い怖い」

と大きな声を出して泣く、すると兄が、

「何怖いことがある者か」

いうて、ちょっと頭にかぶっている帽子に手を触れると、墓場が急に花園に変わる。つまり、世の中に死というものがないということを実したところで、すなわち頭の使い方によって死ぬる生きるということが定まるので、生死は多く主観的の現象とみなしてよいように思う。

「死」の問題に対して (3)

私はこの死ということを思うと、いつでもソクラテスとキリストの死の方に心を慰められることが多い。かのルソーもソクラテスの伝を書いて、彼の自若として死ぬる様には非常に敬服したものと見えて、その伝の筆をおかんとするときに、

「ソクラテスは実に哲学者の死を遂げた」

と書いてその文章を結ばんとした時に、ふと眼前にひらめいたのはキリストの死に方であった。故に筆を取り直して、ほとんど付録のように、

「しかるにイエス・キリストは神の如く死した」

と書き加えた。外から見て、自若として死を迎える胆力は、世に稀とはいいながら、数えれば少なくないと思う。ただややもすると、死をもって最上のドラマのごとく思っているものがある。俺が死ぬんだから、ここで一つ華やかにして見せようというようなものがある。内心人と和し、神と親しみ、心に一点の悔いることなく、安らげく死を迎える。これはすこぶる少ないものだと思う。

「死」の問題に対して (4)

プルタークの『英雄伝』などを見ると、ローマ人の英雄には、よく日本の英雄豪傑に似た人物が沢山ある。その死に臨んだ時なども、いわゆる武士気質を現しているが、しかしその中に死を一つのドラマの如く感じておりはせぬかと思わるるものがたくさんある。これは私の感心しないところである。ただ、何にもない、当たり前通りにして死ぬる様は、これこそ実に敬服に値する。僕は日ごろ、(西郷)南洲翁を崇拝するものであるが、この点においてもますます翁の偉大なことが解る。いかにも生きておっても死んでおっても何も変わらんという風が見える。あるいは死を見ること生の如く、その代わり一方には生を見ること生の如く、形而上幽明有無の区別を知らなかった、実に平々淡々としている。こういう修養ができた人が、一番偉いのじゃないかと私は思う。

心の平和 (1)

心の平和を維持するに最もよい方法は祈禱である。祈禱は英語で prayer という。私が少年の時読んだある英語の本の中に、prayer (祈禱) とは 4 個の Acts (行為) であると教えられてあった。Acts なる字は A と C と T と S との 4 文字から出来ている。A は英語の Adoration (讃美) の頭字、C は同じく Confession (ごんげ) の頭字、T はおなじく Thanksgiving (感謝) の頭字、また S は同じく Supplication (祈願) の頭字である。すると prayer (祈禱) とは讃美、ごんげ、感謝、祈願、の 4 個の行為を含んでいるわけとなる。そこで神に祈禱を探る時には、神を賛美し、神にごんげし、神の恩恵を感謝するとともに、己の欲するものを与えられんことを神に祈願することも必要となる。

心の平和 (2)

しかし祈願は祈祷の全部ではない。わずかにその一部である。祈願が祈祷の全部であると思うは大いなる心得違いである。祈祷の主なる要素は讃美とごんげと感謝とである。もし人が祈願のみに重きを置きこれのみを専らつとめる時は、往々心の平和を破らるる恐れがある。なぜならば神にものを与えられんことを願うて、その願う所のものが与えられざる時は、神は己の祈りを聞き給わず、神は己れの祈りに答え給わぬように思って、心に不満を生じ、平和を破ることがあるからである。しかしこれは決しておのれの祈りが神に達せぬわけではない。

心の平和 (3)

また感謝の祈禱もこれと同様に我らの心に言うべからざる平和を与えるものである。人は病気にかからぬ権利を持っておらぬ。ゆえに病気がいつ吾人を襲い来るも仕方がない。しかるに病気に悩む人が世に多くあるにもかかわらず、自分は病気にかからずして健康でいるのは神の大なる恩恵であると思う。この恩恵を心に感じて神に感謝する。これがすなわち感謝の祈禱であって、心に平和を来たらず有力なる源泉である。世に貧困のために食物を得るあたわずして身体能力を失う者が多くあるが、自分は幸いにして日に3度の食事をなし、業務を営むの能力に満ちている。これもまた神の恩恵として感謝せねばならぬことである。かくて一日の中に神より与えられたる恩恵を数え立てて、神の前に感謝の意を表す。これは実に平和を得る最良の道であると思う。

心の平和 (4)

また讃美に至っては、年若い人には少々難しいかもしれないが、思想の進んだ人は、宇宙万物一切のもの、一切のところに神の栄光をあらわし給うを見て、偉大なる神の愛を思い、仰いで神を讃美することができる。造花に巧みなる人が、己が作った花を天然の花に比べてみて、どうしても天然のものには及ばないことを悟り、ああ神の力は、偉大なるかなと讃美の声を上げる。これが讃美の祈祷である。かくのごとき祈祷は、人心に平和を与えること至大至深である。之によって之を見るに、信者が祈祷を捧ぐるにあたり、祈願はよく注意してなさねばならぬ。ざんげと感謝と讃美とはすればするほど、いよいよ多く心に平和をもたらす。我々はよくこれを努めるよう致さなくてはならぬと思う。